



天正小牧山合戦

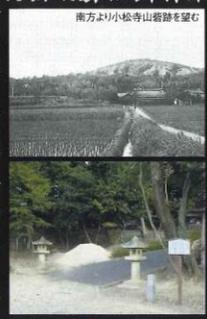


四三〇年前 天下人となる家康、秀吉がともに生存中に戦った。ただ一度の合戦「天正小牧山合戦」。後の徳川幕府への道はこの戦いから始まっていたと言われる。



あ 秀吉軍 小松寺山砦

小松寺山砦には二つの砦があり、西砦は小松寺のあたり、東砦は旧小松寺山一帯にあったとされ、その規模は、西砦は東西八間、南北十間、東砦は十間四方であったと伝えられる。守将は丹羽長秀(長秀の子長重とする説もある)で、兵八千余で陣を敷いた。小松寺山は、かつては小牧山と肩を並べる高さがあったが、昭和四十年代の開発で整地され、現在は小松寺団地となっている。



南方より小松寺山砦跡を望む

い 秀吉軍 田中砦

秀吉方の砦跡で、堀長政、蒲生氏郷、加藤光泰等の將が守備したとされるが、兵力は不明。砦の規模は東西十六間、南北三十間という。秀吉は岩崎山の南麓茶屋前より田中二重堀の砦に至る、二十余町にわたる土塁をわずか一日で築いたとされ、これに対し、家康も小牧山北麓より八幡塚に至る土塁を築いたといわれている。



南西より田中砦跡を望む

う 秀吉軍 外久保砦

久保山の西端に設けられた砦。比高三十四メートルの丘の上に築かれた東西二十三間、南北十六間の砦。守将・兵力共に不明。長久手の合戦後は、秀吉自ら本陣の楽田城からこの砦に出て、全軍を指揮したと伝えられ、太閤山と呼ばれている。現在の熊野神社地帯が砦の位置と考えられる。



南方より外久保砦跡を望む

天正小牧山合戦対陣俯瞰図



え 秀吉軍 岩崎山砦

岩崎山山頂に設けられた砦であるが、規模は不明。秀吉が小牧山に対して砦を構え、稲葉一鉄・貞通父子等を將として兵四千で守らせた。岩崎山の標高は五十四・九メートルであり、現在でも、山頂付近からは小牧山周辺を一望することができる。



岩崎山砦跡より小牧山を望む

い 徳川軍 小牧山城

織田信雄、徳川家康連合軍の陣城。永禄六年(一五六三)に織田信長が築いた居城を改修し陣城とした。山頂に本陣を置き、山の中腹から山麓にかけて曲輪・土塁・虎口等を配し、山の四方に空堀を巡らした。長久手の合戦に家康が出陣した際は、酒井忠次・本多忠勝・松平家忠等が守備した。小牧山には曲輪・土塁・空堀等の遺構が残されており、往時の姿を偲ぶことができる。



大正10年頃の小牧山城(故 津田尚助氏撮影)

い 徳川軍 宇田津砦

信雄・家康連合軍が築いた連砦の一つ。規模は、東西三十四間、南北三十八間で、総構は一町四方のかなり大きな平城であったとされる。秀吉方の二重堀砦に近いため軍道を必要とし、家康は、北外山・宇田津・田楽を結ぶ新道を敷設した。現在は、工場敷内に小さな森が残るのみであり、往時の姿を知ることはできない。



西方より宇田津砦跡を望む

ハ 徳川軍 北外山砦

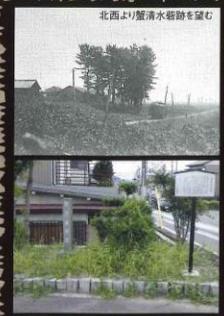
天正小牧山合戦時に、北外山の古城を修復して造られた連砦。東西二十七間、南北二十間。土居の高き一間余の規模を有したとされる。守将は蟹清水の砦と同將の交番であった。現在は宅地化が進み、「城島」という小字が砦の名残を残すだけとなっている。



北外山砦跡北端より小牧山を望む

ロ 徳川軍 蟹清水砦

蟹清水砦は、織田信長の小牧越しの際には、信長の武將丹羽長秀の居城であったと伝えられる。天正小牧山合戦時には信雄・家康連合軍がこの砦を修復し、交番で守備した。砦の規模は東西四十六間、南北六十一間と伝えられる。砦跡は小牧御殿跡の北にあり、昭和二十年代までは堀跡、土塁跡なども残っていたが、その後、開発の波が押し寄せ消滅した。



北西より蟹清水砦跡を望む



史跡 小牧山

天正小牧山合戦(小牧・長久手の戦い)

〈原因〉

本能寺の変(1582)後、織田信長の二男信雄(のぶかつ)や三男信孝が、ともに家督を継ぐことを望んだが、羽柴筑前守秀吉(豊臣秀吉)はこれを良しとせず、信長の孫三法師丸こそ相続者の本筋だ、ととなえてこれを定めた。これに不満の信孝は、柴田勝家と結んで秀吉と賤ヶ嶽で戦った(1582)が、敗れて自殺に追い込まれた。

秀吉に内通していると不信を抱いた信雄は自分の三家老を長島城中で殺害した。この報を聞いた秀吉は、三老臣の弔い合戦と称して出兵、北伊勢に攻撃を開始したので、信雄は徳川家康に援助を求めた。家康は、かつて信長に長篠、三方ヶ原の戦いで援助を受けた恩があるため快諾し、天正12年(1584)3月14日、自ら1万5千余の兵を率いて出発、清須城に入った。

〈戦闘開始〉

この日、秀吉軍の大垣城主池田恒興(信輝)は信雄領内の犬山城を占領した。娘婿の兼山城主森長可(ながよし)は、この戦さに遅れ羽黒(犬山市)に陣したが、徳川軍に攻められて敗走した。徳川軍は地の利に富む小牧山に入った。

〈家康小牧山に陣す〉

小牧山は、信長が岐阜に移って以降、廢城となっていたので、秀吉の大軍と戦えるよう堀を深くする等大規模な修理をし、防備をかためて本陣と定めた。さらに蟹清水、北外山、宇田津(ともに小牧市)、田楽(春日井市)等に砦を築いて秀吉軍に備えた。

〈秀吉出陣〉

大阪にいた秀吉は、羽黒での森軍敗報を聞いて、自ら大軍を率いて大阪城を出発した。3月26日、犬山に着いた秀吉は、池田恒興より戦況を聞くと二宮山(犬山市)に登り家康軍の陣形を望見し、対抗のため二重堀、田中、岩崎山、小松寺山、外久保山(ともに小牧市)、内久保山、青塚(ともに犬山市)、小口(大口町)に砦を築いて兵を置き、自分は楽田の古城を本陣と定めた。秀吉は岩崎茶屋前から二重堀の間、約4キロに土塁を築いて徳川軍の攻撃を防ごうとすれば、徳川軍もまた田楽、宇田津、北外山間に軍道を造って小牧山と結び守備をかため、更に小牧山北麓より田中八幡家(小牧市)にかけて約1キロに土塁を築いて対抗した。

〈両軍の待機〉

この時の兵数は秀吉軍(以下西軍という)十数万、徳川・織田連合軍(以下東軍という)は8万といわれている。このように両軍は、尾北の山野に満ち満ち、戦闘準備を完了し、今にも驚天動地の大決戦が開始されるばかりとなった。しかし、両軍は互いに相手の力を知り容易に戦端を開かず、戦機を熟するのを待った。この間、西軍は小牧山の東麓姥ヶ懐に出撃し、東軍がこれに応戦する小競り合いなど数回あったが、大合戦になる糸口とはならず持久戦に入った。

〈西軍三河進入〉

池田恒興は、秀吉に家康の本領である三河に進入することを勧めた(中入りの戦法)が、これを許さなかった秀吉も再三の進言に遂に許可した。西軍は、池田恒興、森長可を先鋒とし、堀秀政を軍監に三好秀次を旗本頭として、兵二万余を率いて、4月6日の夜半、二宮より南進、池之内、大草(ともに小牧市)を経て、この日は、関田、上条、下条、松河戸(ともに春日井市)一帯に宿営した。案内は落合将監親子(上末城主)。

〈東軍追撃〉

もともと、この宿営地は、かつて信長の御台所(直轄地)・住民を大事にしたところと云われ、旧恩を感じる農民が、このことを小牧山に密告したので、家康、信雄は大いに驚き、直ちに侵攻軍を追撃することとなった。

まず、水野忠重に命じて小幡城(名古屋市守山区)に先行させ、家康も追撃隊を編成し小牧山を出発した。市之久田(小牧市)、青山、豊場(豊山町)、如意、勝川(春日井市)を経て、庄内川を渡り小幡城に入った。案内は江崎善左衛門(小牧)がした。

〈長久手の合戦〉

池田隊はすでに徳川軍が小幡城に入って待ち伏せしているとも知らず、長久手方面に進み、まず先頭が岩崎城(日進市)を壊滅させた。東軍は兵を分けて、4月9日早暁、白山林(尾張旭市)で朝食中の三好軍をさんざんに破った。西軍軍監堀秀政は桧ヶ根で待ち受け東軍を破ると引き上げてしまった。

東軍は兵を合わせて長久手に進んで決戦を待った。敗報を聞いた池田、森軍もまた長久手に立ちかえり、この地で一大決戦が行われた。激戦に次ぐ激戦が続き、池田、森ともに戦死したため兵は敗走した。

〈秀吉進撃〉

この敗報が正午頃、楽田城に届いたので、秀吉は大いに驚き、即刻二万余の大軍を率いて南進した。これを見た小牧山の留守軍、本田忠勝隊は、本隊を助けようと西軍を追尾した。この頃、家康は既に小幡城に入り、秀吉は夕刻、龍泉寺山(名古屋市)に達したが、夜戦の不利を考え明朝に進撃せんと同地に宿営した。しかし、家康は、この夜兵をまとめ、道を迂回して小牧山に帰ってしまった。翌朝、このことを知った秀吉は、兵を率いて楽田城に帰った。

〈両軍の講和〉

これより両軍は、また、小牧、楽田に待機し、それぞれ防備を増して機をうかがっていたが、特に合戦になることはなく、小牧での戦いはなかった。

11月になると、桑名において、まず秀吉と信雄に講和ができ、ついで信雄の勧めにより家康もまた秀吉と和議し、手を握ったので両軍は陣地を解き、兵を引き上げた。ここに八か月の長期にわたって尾北の山野に垂れ込んでいた暗雲はことごとく払われ、平和が再来したのである。

後世、この合戦を「天正小牧山合戦」または「小牧・長久手の戦い」と呼んだ。秀吉、家康が、ともに生存中に戦った唯一の合戦としても有名である。

編集 / (一社)小牧市観光協会
監修 / 郷土史家 入谷哲夫